

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析」（平成29年度第2回研究会）

日時：平成30年3月26日（月曜日）午後2時より午後7時

場所：東京外国語大学本郷サテライト8階会議室

1. 小磯千尋（AA 研共同研究員、金沢星稜大学）「ラームダースの説く『マハーラーシュートラ・ダルマ』とは？」

本発表は、マラーター王国の創始者シヴァージー（1627-80）の精神的な師であるとともに、政治顧問として知られているラームダース（1608-81）が説いた「マハーラーシュートラ・ダルマ」に焦点をあて、その意味を彼の代表的な著作である『ダースボード（覚醒のしもべ）』に求めようというものである。

●ラームダース

ラームダースはその名前が示す通り、「ラームのしもべ」としてのストイックに生きた。その姿はムガル帝国と戦うマハーラーシュートラの人々の心に強い影響を与えた。ブラフマチャリーを通すことと、親の命を守ることの板挟みとなったラームダースは結婚式のムフールト（吉なる時間）のときに姿を消すという苦肉の策を講じる。その後、12年間諸国を遊行し知見を広めた彼は、マハーラーシュートラの民衆の心をひとつにまとめようと実践的な活動を行う。諸国にマト（お堂/僧院）を開き、若者たちの知力・体力の充実を図る場とした。マトでは力と神のバクト（信徒）の象徴としてハヌマーンを祀った。現在も身体鍛錬のジムではハヌマーンが祀られているのを目にする。

ラームダースの忘れてはならない役割は、ムガル帝国と戦ったマラーター同盟の指導者シヴァージーの政治顧問としての活躍である。「精神的な精進も大切だが、頑強な体があってこそその精神的充実」と説き、マトで若者たちに身体鍛錬も課した。ラームダースはヨーガにも通じ、特にスーリヤ・ナマスカール（太陽礼拝）と呼ばれるヨーガのエクササイズを推奨した。本人は毎朝1200回のスーリヤ・ナマスカールを行っていたとされる。

ラームダースは民衆に説いた神秘主義的な教えを巧みに政治と結びつけた。そして理想的な支配者は休むことなく常に活動すべきだと説き、自らも活動的で一か所にとどまることがなかった。有言実行型の聖者ラームダースはマハーラーシュートラの民衆の心をしっかりとつかんだ。

●マハーラーシュートラ・ダルマ

「マハーラーシュートラの宗教/義務/規範/信念/信条/教義」、「マハーラーシュートラ主義」とも訳されるマハーラーシュートラ・ダルマはラームダースの著作『ダースボード』の中で具体的に言及されている箇所はなく、ラームダースが最晩年1681年にサンバーギー（シヴァ

一ジの長子で後継者) に送った手紙の中で言及されているだけであった。以下にその一部分を抜粋する。

(略) すべての聖地は破壊され、バラモンの知はゆがめられ

全地域が混乱し、宗教は死に絶えた

(まさにそのようなとき) ヴィシュヌ神はあなたの心を住処とされ

神々、牛とバラモンを保護し、あなたを鼓舞された

あなたには偉大な学識、詩才、ヴェーダや祭祀の知識があり

鋭敏で論理的な指導者である

ダルマの守護者はあなたをおいていない

マハーラーシュトラ・ダルマはあなたのおかげで守られた

この手紙に言及された「マハーラーシュトラ・ダルマ」からだけでは、ラームダースがこれをどう定義していたかは見えてこない。『ダースボード』には具体的にマハーラーシュトラ・ダルマへの言及はないが、ダルマを遂行する人物として、行動するサントを「マハント」と定義している。

人々と関わる際には、人心を読み解く能力が必要である。常に人々の間にとどまると、無礼や反抗を経験し、あまりに近い関係は互いを傷つけかねない。であるから、人は一つの場所に長く留まらずに、マトからマトへと絶え間なく移動すべきである。また、独りの時間を持つ努力をしなければならない。もし、たゆまぬ努力を惜しみ安楽を求めるなら、人々の生活状況を変えるという目標を達成することはできない。自分も弟子たちも常に神へのバクティに没頭すべきである。(19章-9)

結論から言ってしまうと、本発表ではラームダースの説く「マハーラーシュトラ・ダルマ」の意味を特定することはできなかった。今後、『ダースボード』を読み込んで解明していきたい。

(文責：小磯千尋)

2. 近藤信彰 (AA 研所員) 「南アジアにおけるペルシア語語り物文学の受容、翻案、翻訳：ハムザ物語を中心に」

文章語として、13 世紀以降ペルシア語を受容した南アジアにおいては、当然のことながら、ペルシア語文学をも受容した。最も顕著なものはペルシア語詩であるが、それ以外のものとして、語り物 (dāstān, qissa) があげられる。本報告では、語り物文学のなかで最も有名な『ハムザ物語』を中心に、南アジアにおいてペルシア語語り物文学がいかに受容され、さらに翻案、翻訳されていったかを明らかにした。

『ハムザ物語』は、実在の人物、預言者ムハンマドの叔父ハムザ (625 年没) を主人公とした物語である。サーサーン朝皇帝アヌーシルヴァーンに仕え、その命によって中国からヨーロッパまで各地を転戦し、次々と敵を倒し、捕虜としたのち、一神教に改宗させる。また、皇帝の娘と恋に落ち、試練を乗り越えたのちに、結婚する。しかし、皇帝は君側の

奸に惑わされ、さまざまな手段を使ってハムザを亡き者にしようとする。最後は預言者ムハンマドに会ってイスラームに改宗し、史実通りウフドの戦いで戦死する。

この物語はペルシア語版が起源であるとされ、遅くとも14世紀には、シリアやイランに広まっていたことが史料から明らかである。南アジアにおいも、後代の史料であるが、トゥグルク朝のムハンマド（在位 1325-51）が誦んじていたと伝えられている。現存する最古の写本も15世紀にグジャラートで作成されたと考えられる。ムガル朝のアクバル（在位 1556-1605）は、巨額の富を投じて、『ハムザ物語』の挿絵付豪華本を作らせた。語り物としても、『ハムザ物語』は大いに人気があり、語り師（qissa-khān, dāstāngū）のためのマニュアルまで作られた。19世紀の半ば頃でも、デリーの金曜モスクの北側の壁では、赤い椅子に乗って語り師が『ハムザ物語』を語るさまが伝えられている。

さらに、『ハムザ物語』の翻案として、ミール・ムハンマド・タキーが1756年に著した『夢想の果樹園』がある。グジャラート出身の著者は、やはり、語り師としても有名であったようで、デリーの混乱のなかベンガルに赴いて、15巻からなるこの書を著したのである。もっとも浩瀚なペルシア語民衆文学とも称される本書は、ファーティマ朝（10世紀、エジプト）を舞台としたものである。本書も語り師達によって語られた。

『ハムザ物語』の翻訳の最も古い写本は、1782年の日付を持つ（ダキニー）・ウルドゥー語のものである。19世紀に入ると、フォート・ウィリアム・カレッジで、ウルドゥー語への翻訳が始まった。他には、ヒンディー、パンジャービー、ベンガル、カシミール、テルグ、タミルなどのインド諸語に翻訳された。しかし、最も人気を博したのはウルドゥー語版で、語り師たちの創作を加えた1883年に刊行が始まる版は、計46巻にも達し、大幅に増補されているのである。

以上のように、『ハムザ物語』はペルシア語文化の一つとしてテキスト、語り、挿絵の形で南アジアにもたらされた。しかし、18世紀には翻案が19世紀には翻訳がなされ、語り師たちの創作も加えられて、いまや完全に南アジアの文化のなかに確固たる地位を得ている。ペルシア語文化がいかに受容され、根付き、別の形に発展させられてきたかの好例と言えるであろう。これに対して、イランについては、近世において『ハムザ物語』が語り物として流行していたことは確かであるが、その後の展開は明らかではない。これについては別の機会に譲りたい。

（文責：近藤信彰）

3. 共同研究後半と成果とりまとめに向けた打ち合わせ（全員）

今後の共同研究の進め方を確認するとともに、研究成果のとりまとめ方法について議論を行った。近世南アジア文化に関する研究の最近の動向を、この分野を専門としない日本国内の研究者を含む幅広い層に紹介するとともに、本共同研究の専門的な成果も盛り込む論集の作成を目指し、その内容・構成についてさらに検討していくことになった。

（文責：太田信宏）